

---

# アミル

金澤 樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アミル

### 【著者名】

金澤 樹

【ZPDF】  
20708Q

### 【あらすじ】

地平線の彼方まで草原が続く国イハスクス

ヒンバル族の娘、アミルはヒンバルーと名高い戦士の母ヒスイと、優しい父トウキに守られながら日々穏やかに暮らしを送っていた。

しかしある日、ヒンバル族は黒ずくめの装束の集団に襲われ虐殺の憂き目にあうことになる。

## プロジェクト（前書き）

更新頻度は悪いと思いますが・・・

完結させたいなあ・・・

一応プロジェクトは完成してますがはてさて・・・

## プロローグ？

満天の星空が頭上を埋めつくしている。

見渡す限りに広がる草原は幻想的な光りで照らされ、地平の輪郭をうつすらととらえる事ができた。

アミルは冷たい空気を胸一杯に吸い込み、吐いた息が白く彩られる様子を興味津々といった様子で見つめていた。  
なぜ見る事ができるのに掴む事ができないのかしら。頭に浮かんだとりとめのない疑問に流されるままに白い息に伸ばした手は、むなしく空を掴むばかりだった。

長老のユルグに聞けば答えてくれるだろうか。ついこの間も、なぜ息が白くなる時とならない時があるのかを質問したばかりだ。あんまりしつこく質問ばかりしていたら失礼にはならないだろうか。

そう考えてアミルは頭に浮かんだ疑問を無理やりに振り払うと、自分が立つ小高い丘のふもとへと目を向けた。

そこにはティットと呼ばれる幕家が無数に佇んでいる。遊牧民であるアミル達ヒンバル族の我が家であり、宝もある。分厚い布を簡素な骨組みにかぶせて作るティットは、夏場の夜に我慢が出来ないほど蒸し暑くなる事を除けば、強烈な太陽の日差しを防いでくれたり、冬場には火の暖かさをしっかりと保ち続けてくれたりと、快適な事この上なかつた。

普段であれば冬を目前にしたこの時期の夜遅くなどに、一人丘の上で立ちつくしてなど居たくなかったが、今のアミルにとつて自分のディットに駆け込むには少々都合が悪かつた。

「ボーラブおじさん、まだ帰らないのかしら…」

今まさにディットの中で大人達が繰り広げているであろう会話の内容がアミルには煩わしくて仕方が無かつた。ボーラブは気さくで会話が上手く、アミル自身も彼の事は好きだったが、手土産に持つてきた婚姻の話がアミルにとつてはあまりにも唐突だった。

よくよく考えて見ればアミルも今年で16になるわけだし、むしろ今までに縁談が一つも持ち上がらなかつた事の方が不思議なのかもしない。つい最近も氏族の若衆が、アミルよりも年下の嫁をミブ族から迎え入れたばかりだつた。

「はあ…」

アミルは小さくため息を吐くと、諦めたような顔をして立ち上がつた。そろそろティットに帰らなければ父さんと母さんが心配する。優しい父さんは夜に外を出歩いた自分を微笑むだけで許してくれるだろうが、母さんからは厳しい目線を向けられる事だろう。

自身がヒンバルで抜きん出た戦士でもある母、ヒスイからは、アミルも日々厳しい鍛錬を課せられている。まだアミルが小さかつた頃、に始めた鍛錬で一番初めに叩きこまれた事は礼節だつた。何事にも義をもつて臨み、何者にも忠をもつて接する事。うんざりするほど繰り返された言葉ではあつたが、今日のボーラブに対するアミルの態度はそれとは相反するものだつた事は間違いない。元々が厳しい顔つきのヒスイが、一層目つきを険しくしているであろう姿を想像して、アミルは益々気が重くなるばかりだつた。

## プロローグ？

イハスクス暦300年、獅子王ヴォルガ1世によつて打ち立てられた大王国イハスクスは混乱の時代を迎えていた。建国された当時から、その領土をイハスクスの東西へと広げ続けたイハスクスは前王の時代に諸侯の分裂を招き、モルド王国、ハインツ教皇国、ジード帝国の独立を許している。前王マルムーク4世は寛大王と賞賛される聰明な王であったが、以前からのイハスクスの混乱を抑えきる事ができず、さらに、始めに独立を宣言したモルドへの肅清戦争で多くの民が苦しむ事を苦慮し、結局王軍を動かす事もなく死の床についてしまつっていた。貴族諸侯の中にはマルムーク4世を腰抜けと馬鹿にする者もいたが、近年の腐敗した王達の中に置いては、最も平民に愛された稀有な王として実績を称える者も大勢いた。在位16年の中で彼は、形式化してしまつていた身分議会制を整備なし、全土の特権都市に布かれていた制限の多くを搖るめて経済の活性化をはかった。商業路の多くを各諸侯に警備させ、商人達は数年前には考えられなかつたほど安全に交易ができるようになつた。税制も見直し、豊かになつた商人達を始めとして、同時に行われていた戸籍制を発展させてアミル達遊牧民からも正式に税を徴収し、王国の財政の健全化を図つた。

急速に国が甦つていいく一方で、貴族諸侯は商業路の警備に必要以上の兵力を蓄えるようになる。肥大化した王国の細部に至るまでを、腐敗しきつた貴族に囲まれ、忠臣と呼べる友もいないまま一人奮闘する王が把握しきれるはずも無くかつた。マムルーク4世、享年48歳、多くの民が寛大王の死に涙したといつ。

## プロローグ？

「おお、アミル。どこに行つていたんだ。体も随分冷えたりへ、こつちへ来てすわつたらどうだ。」

ボーラブに笑顔で声を掛けられたアミルは、少し気まずそうに微笑み返して簡易暖炉のそばへと近づいて行つた。

「おじさま、大分飲んでいらっしゃるみたいですね。」

「なに、まだ一甕程度だ、アミルに注いで貰う前に潰れる訳にはいかないからな。それを楽しみにして来たんだから抑えているほうさ。」

「そう言つて豪快に笑うボーラブに苦笑しながらアミルは新しい甕を引っ張り出し、ここにこと上機嫌に笑うボーラブに酒を注いだ。

「アミル」

やれやれと腰を下ろそうとしたアミルに、よくまあこれだけ怒氣を含めるものだと感心しそうなほど棘のある声がかけられた。幕家に入つてからというもの、出来るだけそちらは見ないようにしていたアミルだったが、恐る恐る声の主に目を向けた。

「はい…なんですか母様…」

「なんですか？ではありませんアミル」

刺し貫かれてしまうのではないかと恐れを抱くほど視線を、ビシリシとアミルにぶつける、アミルの母、ヒスイが表情に静かな怒りを湛えてそこに座つていた。

「折角ボーラブが訪ねててくれたというのに、フリリと外に出ていつて半刻も戻つてこなかつたのはどういう事かしら」

「それは…その…」

「ぼそぼそ喋らない！」

「そ、その…！ちょ、ちょっと気分が優れなくて外の空氣を吸いたくなつて！」

「あら、私達の娘は少し気分が悪くなると礼節も度忘れして自分の

やりたいように行動する娘みたいよあなた」

ヒスイはアミルの苦し紛れの言い訳にはまったく取り合わず、眉をきつと上げて、先程から一人黙々と酒を口に運んでいた自分の夫に矛先を向けた。

アミルの父のトウキは片眉を僅かに上げてヒスイを暫く見つめた後、ため息混じりに杯を床に置いた。

「そうカリカリせんでも良いじゃないかねヒスイ。そりゃまあアミルの態度は褒められたもんじゃないかもしないが…。私達とボーラブとの仲じやないか。ボーラブだつてこうして気にしていい事を、君が気にし過ぎる必要は無いだろう」

「親しい間柄だからこそ、よ、トウキ」

ヒスイがそういうとボーラブはくつくつと小さく笑い、トウキの空になつた杯に酒を注ぎ足しながら言つた。

「良いんだよヒスイ、もうこの話題は終わりにしようかとも思つていたんだが、どうやら嫁入りの話はアミルにとっては急すぎたらしい。なに、氏族一の美人と名高いアミルの事だ、そう慌てなくとも欲しい時に理想的な伴侶がすぐに現れる事だろうよ」

「ボーラブおじさん…」

「ちょっと、ボーラブ、気楽な事を言わないで。ただでさえアミルは普段から危機感が足りないので、これ以上楽観的になられたら私達の頭痛が増すわ」

一瞬ボーラブの言葉に安堵した直後だつただけに、母ヒスイの容赦ない言葉はアミルにぐさりと突き刺さつた。

思わずシコンとなつて下を俯いてしまつた。

わかつてはいるつもりなのだ。いつまでも寒い夜に息が白く染まる事に思いを馳せながら暮らしていくはいる場合ではない。

アミルの家族は父のトウキ、母のヒスイ、そしてアミルの三人だけ。他のヒンバル族ではどの家族も15人ほどの大家族で、幕家のの中はいつも賑やかであったのに、アミル達の幕家は随分と寂しい。別に大家族に憧れているわけではなかつたが、アミルが男でない以

上、トウキとヒスイが老いた時、アミル一人で三人の暮らしを支えていくのは相当無理があるようと思われた。

早く若い夫を家へと迎え入れ、子を生み家族を成さなければ安定した生活は、いつか失われてしまうだろう。

頭ではわかっていても、自分でも不思議なほどに、縁談に対しての抵抗感が抜けなかつた。

## プロローグ？

「まあそりゃかりかりするなよヒスイ。とにかく、今日は折角こいつして酒を汲みかわしているんだ、辛氣臭くなるのはよしことや。」  
そういうてカラカラと豪快に笑うと、ボーラブはトウキの持つ杯へと酒を汲み足した。

「・・・まあいいわ。でもアミル、縁談を受ける受けないについて私はあなたの判断に任せるけれど、今日みたいに自分の叔父に対して失礼を働いたら、次はゆるさないわよ。」

ヒスイにギンギン！と音がなりそうなほど劍幕ですごまれたアミルは首をぢぢ込ませ、あまりが悪そうに正座した足をもじもじと組み変えた。

「ところでアミル、今まで本当にどこに行っていたんだね？」  
気まずそうに俯くアミルを励ましでもするかのように、トウキが優しくアミルへと話題を振った。

「おおそうだ、アミル。どうせまたお前の事だ、なにか外で面白い事でもしてたんじゃないか？」

いかにも楽しそうにボーラブにまで尋ねられ、トウキの気配りもむなしくいよいよアミルは小さく縮こまってしまった。

そんな、話す事の程ではないのだ、とアミルは照れ笑いでも浮かべながらやんわりと話を逸らしたかったが、じついう状況ではそういうかない。

斜め前ではヒスイが、これ以上アミルが失礼を働きはしないかとペリペリ神経を尖らせている。

叔父ばかりでなく父にまで尋ねられたことを答えないとなれば、やましいことでもしているのかヒスイの怒りに油を注ぐのは田に見えていた。

かといって「息はなぜ白くなるのか不思議で、ずっと考えていた」「などとトンチンカンなことをのたまつても、それはそれでヒスイの

怒りを買ひそうだつた。

「そ、その・・・星が・・・綺麗で・・・」

しどろもどろになりながら、なんとか嘘にならないよつて言葉を搾り出してみる。

「ああ、また裏手の丘に登つてぞの星空で星座作りでもしてたのかい？」

トウキが優しげにそう尋ねると、アミルは救われたような表情でうんうんと首を縦にふつた。

「ほほーその一人遊びは初めて聞くヤツだな。どれ、どんな星座を作つたか教えてみてくれ」

これまた楽しそうにボーラブが身を乗り出した。それを見てヒスイは頭がいたそうな表情をしたが、なんとか九死に一生を見つけたアミルはいつも自分が夜空に思い浮かべる空想の動物や、そして母ヒスイや父トウキの星座を作つた事まで次々とまくしたてた。

## プロローグ？

「はははー・ヒスイ、良かつたじゃないか。お前もつこに星空に輝くまでになつたようだぞ。たゞや勇ましい格好でいることだらうな。」

ボーラブが豪快に笑うと、ヒスイは眉をひそめてそちらを睨んだ。「失礼ねボーラブ、私の星座ならきっとおしとやかにしているでしょうよ。それより今度ボーラブの星座でも私が作つておいてあげるわ。手に持つものは酒瓶で良いかしら？それとも酒樽の方がお似合いかしらね。」

「こりゃきつい事言つた。これでも最近は嫁に言われて控えているほつなんだぜ？ああ毎日小言ばかり言われた日にやあ、こいつして気楽に飲める場でもないかぎり胃に穴が開いちまつよ。なあ、トウキ。」

「そういわれてもなあ・・・。それに、なんだかその言い草じゃアミルに縁談を持つてきたというよつは、それをネタに酒を飲みにでも来たみたいだぞボーラブ。」

トウキがそう言つと、それまで不機嫌そうにしていたヒスイもこうふうと笑い、生きた心地がしなかつたアミルもやつと穏やかな気持ちになることができた。

結局その日は夜がどつぶりと更けるまでボーラブと4人で過ごしたアミルは、ようやく横になつた布団の暖かさをかみしめながら、うつらうつらとまた考えごとに思いを馳せていた。

ボーラブに話した自分の星座たちのこと、唐突に（といつても今まで出てこなかつた事が不思議なほどだったが）持ちかけられた縁談のこと、抱き付いてしまいたくなるような表情で微笑む父のトウキやヒスイのこと。

様々なことが眠りにおちやうな頭の中でグルグルと巡つては溶けていく。

アミルは眠る前のこの考え方の習慣がたまらなく好きだった。

この考え方のせいで翌日寝不足になることもしばしばだったが、もう癖のよくなつてしまっていたので今更やめよつとも思わなかつた。

「結婚……か……。」

口に出して呟いてみると、何ともいえない違和感が自分の中に広がつていくを感じる。

父や母に、このことについて急かされたようなことは今までに一度もなかった。もちろん今日の話もトウキやヒスイは無理にでも受けさせようなどとはしてこなかつた。ヒスイが怒つていたのもあくまでボーラブを放つておいて逃げ出したことに對してであつて、縁談を嫌がつたことに対しても対してではない。結婚に関しては非常に放任主義な両親であつた。

そのせいもあって、今まで一度も真剣に考えるようなことがなかつたのだが、もうそろそろそんなことも言つていられない年になつていふことが痛いほど身に染みた。

「やっぱり、しなくちゃ駄目なのかな……。」

アミルは父と母の三人で暮らす今の生活がたまらなく好きだった。

子が欲しくないわけではない。

きっと自分に赤ん坊が産まれれば、やはり父や母と同じようにたらぬく愛おしいのだろうと思つ。

ただ、アミルは嫁入りをして、大好きな父や母と離れることが堪らなく寂しかつた。

## プロローグ？

「……アミル、眠れないの？」

「……かあ様？」

布団に入つてからもう随分と時間がたつ。父も母もとうとく眠りについたものだと思っていたアミルは、ヒスイがまだ起きていたことに少なからず驚いた。

アミルの寝つきが異常に遅いということもあったが、少なくとも今までこんなに母が寝付いていないという記憶はアミルにはなかつた。自分と同じように、なにか考え方でもしていたのだろうか。

「『じめんなさいかあ様、起しちゃつたかな。』

「……いいえ、少し考え方をしていたのよ。アミルこそ大分長いこと寝つけないでいるのね。」

そう潜めた声で言しながら、アミルの隣で体を横にしていたヒスイは静かに体を起こした。

少し何事か考えるようこしてアミルを見つめたヒスイは、やがてそつとアミルの頭に手を添え、アミルの長い髪をすべすべでほじめた。

ヒスイの手はさうとうとしていて、アミルは思わずついついほどに心地良かつた。

綺麗なかあ様……。

性格は男勝りだし、武勇でも一族にはヒスイに並ぶものなどいないほどであったが、何よりもヒスイは娘のアミルからみてもため息が出来るほどに美しかった。

一族の中でもトウキはよく羨ましがられたり豚に真珠だからかわれたりしていたが、たまに山羊を売りに街に降りると余計に凄く、街行く人々が必ず振り返るほどだ。

本人が礼節や作法にうるさいことも相まって、立ち振舞いもどこかの貴族の女性がお忍びで街に降りてきてでもいるかのようだった。

「アミル……。」

「はい、かあ様。」

ヒスイはアミルの名を呼んだものの、何か言つことを躊躇つてでもいるかのように、そのまま黙り込んでしまう。ただ髪を梳く音だけがなり、アミルは珍しく何事か言い淀む母の顔を不思議そうな目で見つめた。

「どうしたの、かあ様。」

そう聞くと、ヒスイはまた暫くアミルの髪を無言で撫でてから静かに微笑んだ。

心の中が暖かいもので満たされていく程に慈愛に満ちたその笑顔に、アミルは思わずうつとりと見惚れてしまった。

「いいえ、なんでもないの。何か、あなたに話しておいてあげようと思つたのだけれど……。忘れてしまったわ。」

「……変なの、かあ様。」

そつ眞つてアミルもヒスイに微笑みかける。

「ねえかあ様、じゃあ私から聞いてもいいかしら。」

「なあに。良いわよ。」

「かあ様とどう様つて、どう風にして結婚したの。」

そう聞くとヒスイは少し驚いたように口を開いたが、すぐさまクツクツと小さく笑い声をあげた。

「なあに？ なにが面白いのかあ様。」

アミルが不思議そうにみつめると、ヒスイはまた穏やかな微笑を浮かべながら静かに首を振った。

「いいえ、なんでもないわ。・・・そうねえ、どこから話してあげたらいいやら・・・。」

「初めて出会った時の話が良いわ、かあ様。」

「もう・・・、それじゃあ、何か羽織つて外で星でも見ながら少し話をしてあげましょうか。ここで話していくとトウキを起こしてしまうわ。」

アミルはすっかり眠気のとんだ瞳をキラキラと輝かせながら頷くと、いびきをあげるトウキを起こさないように静かに布団から抜け出し、ヒスイの手を握りながら満天の星空が輝く丘の上へと登つていった。

## プロローグ？

「綺麗ね・・・。」

そう呟いたヒスイは満天の星空を見上げながらため息をついた。  
もう大分ながいこと、こうして星空をまじまじと見つめたことなど  
なかつたように思つ。

「アミル、さつきボーラブに話していく星座達はどうにあるのかし  
ら。」

そう聞くと、アミルは嬉しそうに頬を上氣させながら次々と星座の  
場所をヒスイに教えていった。

「あの場所にかかる星座があるのよ。」

アミルが指差す方向に顔を向けてみると、一際橙色に輝く大きな星  
が見えた。

「あの、橙色の星の場所？」

「うん、あの星。」

「そう・・・。」

その星の輝きは、なんとも暖かで、しかし凜としてとても美しい星のようと思える。

そんな星を自分の星座の中心に据えてくれたアミルの、自分に対する愛情が伝わってくるようで、ヒスイは心中にアミルを愛おしく思ふ気持ちが溢れてくるようだつた。

「ありがとうアミル。とても素敵なお星だわ。」

そう言つてアミルの頭を優しく撫でると、アミルは嬉しそうに頬を染めてヒスイの腕に頭をすり寄せた。

「それでね、どう様の星座はその隣にあるのよ。」

「そう・・・。」

アミルは次々と星を繋ぎ合わせ、星座の形をヒスイに教えてくれた。  
なにせ満天の星達の話しだつたので、ヒスイにはアミルの思い描く通りの形を繋ぎ合わせられた自身はなかつたが、一つの星座は仲む

つまじく寄り添い合つてゐるよつとに見えた。

ひとしきり星座の説明をすることに満足したアミルは、ねだるような視線をヒスイへと向けた。

「ねえかあ様。とお様とかあ様は、どうやつて結婚したの。」  
そう聞くアミルはまるで小さな子犬のようで、ヒスイは思わず微笑した。

「知りたい？」

アミルはすぐさま「クククと頷く。

「知りたいわ。駄目？かあ様。」

「いいえ、駄目じゃないわよ。」

ヒスイは微笑みと共にアミルに静かに首を振つてみせた。

「そうね・・・かあ様がまだ赤ん坊だったころに、コルグ様に拾つていただいた話はしつているわよね。」

「ええ、山羊を売りにいった街の片隅に、1人で・・・うんと・・・。」

「そう、1人で、捨てられていたらしいわ、私は覚えていないのだけどね。」

アミルが自分の横であからさまにシウンとした様子を感じた。  
きつとそんな話が出てくるとは思つていなかつたのだろう。

自分の母の気持ちを傷つけたとでも思つてゐるかも知れない。

「私は1人だつた・・・。コルグ様が拾つてくるださらなければ、きっと今ここに私はいないでしょつねえ。」

「・・・。」

「私の一番古い記憶は、その話をコルグ様から聞いた時の記憶。きっと自分に父も母もいないことを不思議に思つて、教えてくれと駄々でもこねたのでしょうかね。」

ヒスイはまだ幼かつた頃の自分に思いを馳せた。

その時の情景こそ鮮明に記憶してゐるもの、何を感じ、思つたのかは覚えていない。

めつと、傷ついたのだけ。とても深い。

## プロローグ？

「だからかしらね、私は極端に友人を作りうることを避けているわ。あなたならよくわかるでしょう。季節と共にこの国をさすらつて暮らす一族の中で、誰とも絆を作ろうとしないことの危うさと、愚かさが。」

「……かあ様は愚かじやないわ。」

悲しそうな瞳でアミルがヒスイを見つめる。

「いいえ、愚かだわ。それで良いと思っていたことが何より愚か。助け合つていかなければいけないこの暮らしの中で、自分ひとりで生きていると勘違いしていたわ。……おかしいわよね、一人で生きているはずがないじゃない。皆が働いて、許してくれて、見守つてくれたからこそ育つことができていたっていうのに。」

「……。」

ヒスイは横で目に涙を浮かべてうなだれるアミルに微笑みかけ、柔らかく髪を撫でた。

アミルはよくわかっているのだろう。

自分が一人で生きているわけではないということを。

人に、ものに、動物に、草花に、星達や太陽に育てられて、今の自分があるということを。

自慢の娘だと、ヒスイは内心誇らしく思った。

「そんな風に捻くれながら暮らしていったある日、ユルグ様の山羊を追っていた私のところにトウキがやってきたの。」

「とお様が？ 一人で？」

「ええ、優しい顔でやってきてね。だけどその頃の私は随分と捻くれていたでしよう？ ぞろいじめにでもきたのじゃないかと随分勘ぐつたものだわ。」

「とお様は、どうしてかあ様の所に来たの？」

「山羊の追い方を聞きに来たの。変な人でしょう。その頃の私は随分と一族の中では敬遠されていたのに。」

「とお様は、山羊を追つたことがなかつたのです？」

アミルが不思議そうに首を傾げる。無理も無い。ヒンバル族の中で山羊を追うのは子供達の仕事だ。小さいうちに山羊を追つたことがない子どもなどいない。

「いいえ、トウキも上手に山羊を追つていたわよ。ただどうも、私の方が上手く追えていると思ったらしいのね。私には自覚はなかつたけれど、まあ無理もないわ。族長のユルグ様がもつ山羊達だもの。気性が良い山羊が多かつたとはいえ、トウキがその時追つていた山羊のゆうに三倍もの山羊がいたからね。」

「すごいわかかる様、私、ユルグ様の山羊を一人で追う自信なんかとても無いもの。きっとお様もかあ様に感心していたんだわ。」

ヒスイのことを誇らしげに思ったのだろう、アミルの目は先程とは打って変わつてキラキラと輝きだしていた。

「それでもないのよ。トウキもそうだけれど、他の家の子供達は弟や妹、赤ん坊の世話を追つて忙しかつたのに、私には山羊を追うことしか仕事がなかつたから。・・・まあいいわ。とにかく、そうしてトウキが話しかけてきた時が初めての出会いと言つても良いかもしれないわね。それまでにも顔を見かけたことは何度かあつたけれど。」

「それで、二人はどうなつたの？」

話の続きを氣になるよう、アミルはヒスイに早く早くとねだる。とても16歳の娘には見えないその姿にヒスイは思わず苦笑した。

## プロローグ？

「トウキはあの通り変な人でね。どんなに冷たくあしらっても何度も私が山羊を追っている所にやつてきたわ。そりやもうしつこかつたわよ。にこにこしていて良い人に見えるけど。トウキも存外捻くれていたわね。それで、あんまりしつこくてね、ある日とうとう私が癪癩を起こしてしまったの。いい加減にして頂戴！私は一人でいたいのよ！つてね。」

クスリ、とアミルが笑う。いつもヒスイが癪癩を起こしている姿を間近にみているアミルのことだ。若い頃のヒスイが怒っている姿が目に浮かぶようだったのかかもしれない。

「そうしたらね、ひどいのよ。トウキったら。私の剣幕があんまり恐ろしかったのかもしれないけれど、しくしく泣き始めてしまったの。『ごめん、そんなにいやだなんて、思つてもいなかつたんだ』ですって。」

アミルは「ロロロ」と声をあげて笑つた。

「それから、ふつりとトウキは来なくなつてしまつてね。また私は一人ぼっちに逆戻り。」

「とお様、いくじなしだわ。」

アミルが口を突き出してふてくされる。見ていて飽きない表情の変化のしようだつた。

「とお様のこと、そんな風に言つてはダメよ。」

微笑みながらそう諭すと、アミルは今度はシュンとうなだれる。

「でも、かあ様が・・・可哀想・・・。」

そう言つてアミルは目に涙を浮かべる。ヒスイはアミルの頭を抱きかかえるように腕を回して静かに首を振つた。

「いいえ、可哀想じやないわ。自業自得よ。折角トウキが心を開いて向き合つてくれようとしたのに、余計なことはするなど叩き帰してしまつた私が悪いの。」

「・・・」

「暫くはせいせいしたなんて思っていたのだけれどね、段々と、気持ちが落ち着かなくなってきたの。わざわざトウキのディットの側を山羊を引き連れて歩いてみたりね。なんだか、とても寂しくなつてしまつたの。自分から拒んだくせに、いざトウキが話しかけにきてくれなくなると、もう一度話しかけて欲しくて堪らなくなつたわ。

ホンの少しだけ、アミルが嗚咽を漏らす。気持ちが入り込んでしまつたのかもしれない。

「遠くにトウキが山羊を追つて、いる姿がいつも見えていたわ。私は全然違うほほに顔をむけながら、遠目にトウキのことを見ていたの。意気地なしなのはトウキじゃないわ、私の方。素直に謝れば良いのに・・・ちつとも勇気が湧かなかつた。」

ヒスイはそつとアミルの涙を指ですくつてやつた。

「そうしてやきもきしながら過ごしていたらね、ある日ユルグ様に呼ばれたの。槍の演舞で勝負したいやつがあるそうじやがつてね。」

「・・・槍の演舞？でも演舞つて・・・」

「ええ、個人的にやるようなものではないわよね。年に1度、街の収穫祭に合わせて行われる演舞会で競い合つて、一番美しく舞えた者が一族の代表として王の御前で他の氏族と共に披露する、とても神聖なものだわ。」

「うん・・・。」

「人に易々と見せるものでもないし、ましてや個人的に競い合うなんてやつてはならないことだわ。その時の私もそう思つてね。ユルグ様に大分ごねたの。でもユルグ様、笑つて、いるばかりでちつとも取り合つてくれないの。結局私が折れてね。一体その物好きはどんなヤツだつて聞いたのよ。」

「・・・とお様？」

「ええ・・・そう、トウキだつたわ。今でもそのことを告げられた時に顔が一瞬で熱くなつた感覚を覚えてる。でもその後にユルグ様

がいった、演舞にかけるものを聞いて思わず噴き出してしまったわ。

「とお様は、何を演舞にかけたの？」

「『トウキのやつはな、お前に負けたと思つたらヒンバルを離れる  
そひじや、ただな、もしもお前が負けたと思つたら・・・。』

「思つたら・・・？」

「『山羊の追い方を教えて欲しいそうだ』

「へ？」

嫁になつてくれといひセリフでも予想していたのだろう、肩透かし  
をくらつたようにアミルの顔は笑になつた。

「トウキらしいでしょ？」

「それは・・・とお様らしいけど・・・。」

「嬉しかつたわ。」

「そうなの？」

「ええ、だつて・・・それはもつ」

プロポーズでしょ？

微笑むヒスイの顔は、幸せで満たされていて、まるで女神様のよう  
だとアミルは見惚れてしまつた。

「・・・その勝負、どひなつたの？」

「・・・秘密。」

クスクスとヒスイは笑う。

「・・・ひどいわ、かあ様。」

「そひ？今度トウキに聞いてみると良いわ。私からはもうこれ以上

教えない。」

「良いけど……。」

ブスッと顔を突き出してアミハはふてくられる。

「や、今日の話はいれでおしまい。いい加減眠らなくひや。明日も……。」

そう言って立ち上がりかけたヒスイの表情が一瞬で、穏やかな微笑みから警戒をあらわにしたものに変化した。

その変化にアミルの心臓の鼓動が跳ね上がる。  
「ど、どうしたの？ かあ様。」  
「しつ、静かに……。」

ヒスイはアミルの方には目を向けずに星明かりに照らされた、ヒンバル族の集落から遠くはなれた草原を睨みつけていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0708q/>

---

アミル

2011年10月6日13時54分発行